

独自の英語プログラムと 小中連携の指導体制を整え、 世界で活躍する人材を育てる

「自立する児童生徒」の育成を目標とする千葉県流山市が、「確かな学力の育成」の具体策の1つに掲げているのが、英語教育の推進だ。小学校で活用する「流山市英語プログラム」は、指導主事や小・中学校教員、ALTが協力して作成。内容を全小学校で共有し、教育の質を担保している。2014年度には、文部科学省の拠点事業の指定を受け、小・中・高が連携して取り組みを深化させている。

- ◎東京都心から25km圏内にあり、利根運河と江戸川に囲まれた、森や公園が多い自然豊かな地域。2005年のつくばエクスプレスの開業により首都圏へのアクセスがよくなり、「都心から一番近い森のまち」として、人口が年々増加中。
- ◎人口…約17万8000人 ◎面積…35.32km²
- ◎市立校数…小学校16校、中学校9校 ◎児童生徒数…14,048人
- ◎電話…04-7150-6105（学校教育部指導課）
- ◎URL…<http://www.city.nagareyama.chiba.jp/176/index.html>

千葉県流山市 プロフィール

教育長の 戦略

市内全小・中学校で指導ノウハウを 共有し、英語教育の質を担保する

流山市教育委員会 教育長 後田博美

臆せずに英語を使える 子どもたちを育てたい

現在、流山市では人口増加が続いており、2015年の1年間で約4,000人増えました。首都圏への利便性もさることながら、本市の教育に魅力を感じて居住を決めた家庭も少なくありません。保護者や地域からの期待が大きく、教育の質の向上が大きな課題であることから、9年間の連続した教育環境づくりに力を入れ、小中一貫した教育を推進しています。

各中学校区では、それぞれ特色を生かした活動をしています。例えば、敷地が隣接している市立西初石小学校と西初石中学校、千葉県立流山おおたかの森高校は、3校合同のあいさつ運動や清掃活動、国語や算数・

数学で教科内容接続のための情報交換会などを展開しています。

本市の子どもの多くは素直で真面目ですが、よい意味で我を通し、自分の考えを堂々と主張できる子どもはそれほど多くありません。そうした子どもたちがもう一步、ステップアップするために必要な施策として、2011年の教育長就任時に「流山市学校教育指導の指針 グランドデザイン」(図1)を示しました。目標とする「自立する児童生徒」の実現に向けて、学力面の充実を図る施策の1つに、「グローバル社会で生きる力の育成」を掲げています。

子どもに英語によるコミュニケーション力をつけたいというのは、小学校校長をしていた頃からの思いです。本市には外国人が比較的多く居

住し、日常的に接する機会も少なからずあります。そこで、子どもたちに、日常会話ができる英語力や、臆せずに英語を使おうとする姿勢を身につけてほしいと考え、地域の外国の方々にも協力してもらい、校長在任時に週1回の国際理解教育を行っていました。そうした活動を全市に広げたいという思いから、グランドデザインに英語教育を盛り込んだのです。

全校体制でノウハウの浸透と 教育の質の担保を図る

ALTは、市で15人を直接雇用し、学級数に応じて市内全小・中学校25校に配置しています。そのほかに、英語活動指導員が各小学校に1人常駐し、ALTとともに指導にあたっています。これも市の予算で雇用して



うしろだ・ひろみ 中央大学経済学部卒業後、千葉県内の公立小学校教諭、流山市教育委員会指導主事、流山市立南流山小学校校長、流山市教育委員会学校教育課課長、同学校教育部部长、流山市立小山小学校校長などを経て、2011年度から現職。

うは、全小学校で共有しました。

英語の年間授業時数は、拠点校の3・4年生は35時間、5・6年生は70時間ですが、そのほかの学校も教育課程特例校の制度を利用して、3～6年生で各35時間としました。

数値を意識した効果検証が教育をよりよくする

グランドデザインを示した際に、私にはもう1つの思いがありました。それは、先生方に「数値」を意識してもらうことです。教育の成果は短時間で測れるものではありませんが、言葉だけでは保護者や地域の理解がなかなか得られないのも事実です。そこで、2011年度比で10%の学力向上を目標に打ち出し、指標の設定や活動内容は各校に任せながらも、検証結果を報告してもらうようにしました。難易度の高い目標であるた

め、たとえ達成できなかったとしても、客観的に分析してその要因を把握し、解決策を考え、校内で足並みをそろえて課題解決に取り組む体制を構築してほしいと考えたのです。

成果は大きく表れました。先生方の意識改革と努力が実り、2015年度までの3年間でほぼ目標を達成できました。2016年度の市予算で教育費の比率が2番目に高いのは、教育行政が評価された結果だと捉えています。

私たちの願いは、世界で活躍できる人材を流山から輩出することです。それは、海外に出るといっただけではなく、グローバル社会の中で認められるような存在になってほしいということです。今まで以上に教育を充実させ、子どもたちの能力と志を高めていくことが、本市の使命だと考えています。

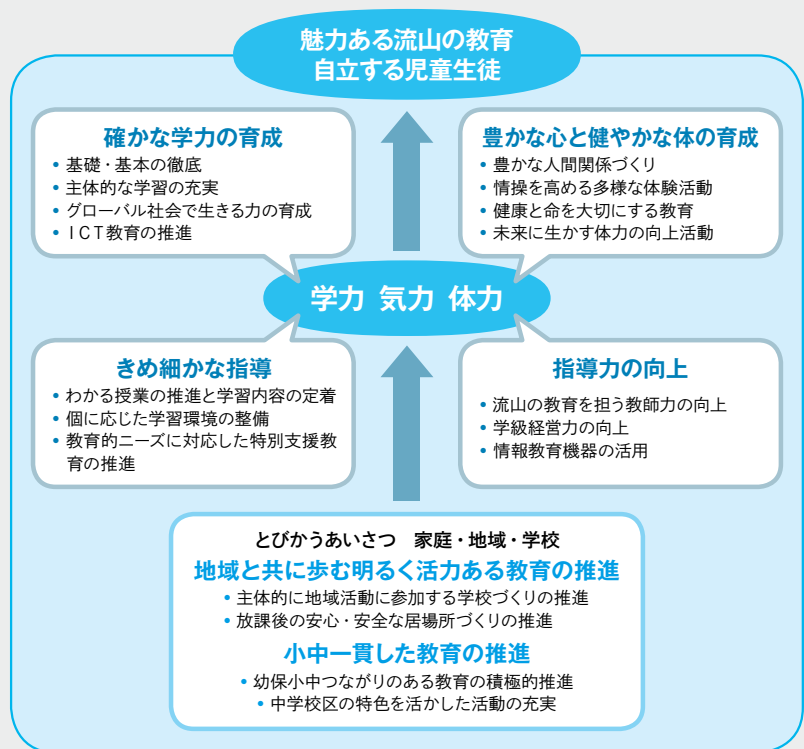
います。

2014年度には、千葉県内では本市が文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」に採択されました。小学校3校、中学校2校、県立高校1校を拠点校として、合同の研究会、CAN-DOリストの作成と活用、児童・生徒や教員間の交流などを進めています。特に、小・中の指導内容の共有は、適切な接続や指導の効率化を図る上で大きな役割を果たしています。

本事業は市全体で取り組み、各校の教育の内容や質をできる限りそろえるように心がけています。その実現のため、各校にノウハウが浸透するように、最初から全校が足並みをそろえて取り組む必要があると考えました。

例えば、小学5・6年生が使用する「流山市英語プログラム」は、2013年度から、指導主事や小・中学校の教員、ALTが協力しながら作成しました。児童用ワークシートも同様に作成し、それらの活用ノウハ

図1 流山市学校教育指導の指針 グランドデザイン



体力面での実績も目覚ましく、オリンピック選手を輩出しているほか、千葉県の「遊・友スポーツランキングちば」の上位10校に、流山市の学校が複数ランクインしている。

*流山市教育委員会提供資料を基に編集部で作成



教育委員会の 施策

「流山市英語プログラム」を作成し 全小学校で系統的な英語指導を展開

流山市教育委員会

ALTのノウハウを活用し 独自のカリキュラムを作成

流山市の英語教育には、2つの特徴がある。1つは、市独自に小学5・6年生用の「流山市英語プログラム」を作成し、それを基に市内すべての小学校が指導していること。もう1つは、中学校区内の小・中学校で英語教育を連携していることだ。この2つについて、具体的な取り組みを見ていく。

「流山市英語プログラム」の作成に着手したのは、2013年度のこと。それまで、小学校では、『Hi, friends!』を教材として、担任とALT、英語活動指導員が協力し、子どもの実態に応じた指導をしていた。ところが、指導方針が統一されていなかったため、担任やALTによって授業内容が異なり、学年間で活動内容が重複していたり、子どもには難易度の高い内容が含まれていたりするなど、指導の系統性に課題があった。学校教育部指導課の郡司美紀指導主事は、

次のように説明する。

「小学校英語の教科化を見据え、発達段階に応じて系統的に指導できるカリキュラムが必要でした。そこで、当時の実態を危惧した教育長の強い意向もあり、5・6年生の外国語活動について、統一のカリキュラムの作成にとりかかりました」

まず、市内のALTが各校・各学年でどのようなことを教えているのかといった情報を集め、それらを指導主事とALTが中心となって整理した。時には、中学校の英語科教員のアドバイスを得ながら、「5年生には難しい内容ではないか」「小学校卒業時までに、ここまでではできてほしい」

といった議論を重ねた。そうしてつくり上げたカリキュラムを基に、各校が年間指導計画を立て、各授業の指導案と児童用ワークシートを作成した。

「2014年4月までに1学期の指導計画、秋までに2・3学期の指導計画を立てるという形で進めたので、現場の先生方は相当苦労されたと思います。市教委では、年間指導計画のモデルを作成し、先生方が進めやすいようにアドバイスするなど、支援に努めました」（郡司指導主事）

各校の実践で得られた成果や課題は、指導主事とALTが学校を訪問して共有した。そして、現場からの「内容的に難しい」「やることが多い」と

図2 「流山市英語プログラム」UNIT4 Part1（小学6年生対象）

「流山市英語プログラム」は6ユニットから成り、1つのユニットは2～4のパートで構成される。ユニットごとに目標が設定され、さらに各パートには目標、学習する表現、扱う語彙が示されている。具体的な活動内容も例示され、これを基に各校でワークシートなどを活用し、授業を行っている。

*流山市教育委員会提供資料をそのまま掲載



学校教育部指導課
課長

佐藤智子

さとう・ともこ

千葉県内の公立中学校教諭、教頭、流山市教育委員会指導主事などを経て、2016年度から現職。



学校教育部指導課
指導主事

郡司美紀

ぐんじ・みき

千葉県内の公立中学校教諭などを経て、2014年度から現職。担当教科は英語。

いった意見を受けてカリキュラムを見直し、2014年度末により平易でシンプルな第2版「流山市英語プログラム」を完成させた(図2)。

教員用指導書も作成し 指導の標準化を図る

5・6年生で活用している「流山市英語プログラム」は、3・4年生で取り組む『Hi, friends!』の内容を継承・発展させる内容となっている。教室で使う英語表現などを学ぶ「ユニット1」に始まり、あいさつ、アルファベットの基本、自己紹介、自分が住む町の紹介、訪れたい国・都市とその理由などの内容を扱う、全6ユニットで構成されている。

教員用指導書も作成し、「すぐに英語を使わせるのではなく、楽しいアクティビティーでゆっくり学習していく」「言葉以外のコミュニケーションについても紹介する」など、担任やALTが配慮すべき点も盛り込んだ。

それらは、すべてデータ化して市内の小・中学校に配布。2015年度からは、全小学校が年間35時間分の指導計画と指導案を基にして、スムーズに英語教育を進めている。

小・中の情報共有により 中学校英語の深化を図る

「流山市英語プログラム」で培った英語力を、中学校が引き継いで、さらに伸ばしていくための鍵となるのが、小中連携だ。

「中学校教員をしていた当時、小学校で外国語活動を経験してきた生徒に初めて英語の授業をして、生徒たちが予想以上に英語でコミュニケーションが取れることに驚きました。今や生徒は英語の初修者ではありませんから、小学校で身につけてきた英語力を中学校でさらに伸ばすという意識で授業を行う必要があります。そのためには、小・中学校の教員の

間でしっかり情報を共有し、生徒の英語力を把握しておくことが欠かせません」(郡司指導主事)

「流山市英語プログラム」の指導案例を作成した時には、「流山市英語プログラム推進委員会」の全6回のうち2回に、中学校の英語科教員が参加し、中学校の立場から指導案や使用教材についてアドバイスを得た。さらに、市内の小・中学校の英語担当者が集まる「流山教育研究会」(年3回)や外国語活動研修会、夏休みに親睦会を設けて交流を深めるといった中学校区独自の取り組みも行われている。学校教育部指導課の佐藤智子課長は、次のように語る。

「以前から小中連携に力を入れてきたこともあって、英語に限らず、他教科でも、小・中学校の教員同士が課題を共有しようとする意識を強く持っています。拠点事業の推進にあたって、そのような本市の強みを生かすことができていると感じます」

英語力の「見える化」で 成果と課題を明らかに

今では、小学校には「流山市英語プログラム」に基づく外国語活動が定着し、中学校では小学校の教育内容を踏まえた指導が行われるようになった。当初、小学校には外国語活動の指導をためらう教員もいたが、拠点事業が始まってからは前向きに取り組む意識が浸透している。

「一度も外国語活動を経験していない小学校教員は、ほとんどいないと思います。国や市がここまで力を入れている以上、避けては通れないという意識もあるからでしょう。楽しみながら英語を身につけてほしいと考える教員も多く、小学校には英語で書かれた掲示物がたくさん貼られるようになりました。一方、中学校には教科の壁が存在しているため、学校全体の取り組みにする方法を模

索しています」(佐藤課長)

以上の英語教育を進めた結果、英検3級程度の英語力を持つ中学3年生が、国が目標とする50%を超えた。70%以上の中学校もあるという。

2016年2月には、拠点校の中学2年生がGTEC for STUDENTS*1(以下、GTEC)を受検した。GTECにはライティングのテストがあり、複数の外国人採点者が観点別に生徒の英語力を評価する。

「個人別成績票が返却されるだけでなく、採点者から生徒一人ひとりに、英語でメッセージと学習のアドバイスを書いてもらえます。生徒が今後の学習に生かせると考え、採用を決めました」(郡司指導主事)

GTECの結果では、ライティングが自分の意見や感想を2～3文の英語で書くことができるグレード2を超えた一方、リーディングは期待したような結果が得られなかった。そのため、2016年度は様々な洋書を購入し、多読によるリーディング力の強化に取り組んでいるという。

また、すべての中学校と拠点校の小学校が各校独自のCAN-DOリストを作成し、各学期・各学年で身につけさせたい力を意識した指導が行われるようになった。

このように、英語力を客観的に測ることで生徒個々の課題発見につながり、それらを基にした新たな取り組みへと発展しているのである。

今後の課題は英語と国語の連携を図ることだと、佐藤課長は言う。

「元々人前で話すのが苦手な子どもたちに、英語で話をさせるのは容易ではなく、語彙が少なければ表現力もつきません。これからは、国語でもプレゼンテーションやShow and Tell*2などの要素を取り入れ、英語と国語を両輪として位置づけて、相乗的に表現力を高めていきたいと考えています」

*1 ベネッセが提供する中学・高校生対象のスコア型英語テスト。「聞く」「読む」「書く」の3技能を測る。さらに、「Speaking(話す)」をオプション受検することで、4技能を測ることも可能。

*2 みんなの前で何かを見せながら、それについて話をする活動。



学校現場の 実践

小学校の学習内容を踏まえた パフォーマンス重視の授業で力を伸ばす

流山市立西初石中学校



◎ 1985（昭和 60）年創立。教育目標は「自ら学びとり、自立し、さわやかな言動がとれる生徒の育成」。2014 年度、文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」の指定を受ける。

校長 高橋徹先生

生徒数 311 人

学級数 10 学級（うち特別支援学級 1）

電話 04-7154-3091

URL <http://www.nagareyama.ed.jp/nshatutyuu/index2011PC.htm>

小学校での学習内容と 理解度を把握し、授業を構築

流山市立西初石中学校は、市内でも規模が小さい学校だ。同校の課題について、高橋徹校長はこう語る。

「本校は落ち着いた環境にあり、教育に対する保護者の期待には高いものがあります。生徒は素直で真面目な半面、力強さや粘り強さに欠ける点があり、自己決定力や自立心を養うことが課題だと感じています」

そうした中、2014年度に文部科学省「英語教育強化地域拠点事業」の指定を受け、隣接する同市立西初石小学校、千葉県立流山おおたかの森高校と、小・中・高の連携を図りながら、英語教育の研究に取り組んでいる。同校の研究の柱は、①小学校の外国語活動の成果を生かした指導方法の構築、②言語活動を中心とした授業のあり方、③外国語表現・理解能力の育成、④CAN-DOリストを活用した学習到達目標の設定、⑤英語で行う授業の検証の5つだ。

この中で、①小学校の外国語活動の成果を生かした指導方法の構築は、小中一貫した教育を推進する市の教育の根幹にかかわる部分だけに、同

校でも特に力を入れている。

英語科教員は、入学した生徒の英語力を見取る以外にも、小学校で活用されている『Hi, friends!』や「流山市英語プログラム」にすべて目を通し、小学校の学習内容の把握に努めている。例えば、小学6年生で「I want to be～」という表現を使って将来の夢を語らせていることが分かれば、中学2年生で不定詞を扱う際に、生徒が経験していることを踏まえて、授業展開を構想する。

ただし、小学校で扱った表現でも、生徒は学習済みという前提で授業を進めるわけではない。英語科で研究主任の柿葉敦子先生は、次のように説明する。

「授業で『6年生の時にやったよね』と言ってしまうと、生徒には過度なプレッシャーになります。授業の最初に、生徒がどの程度、文法を身につけているのかを探り、小学校で経験したことを生徒が自分で思い出せるように配慮しています」

拠点事業3年目の2016年度の新生入生は、その大半が、^{りょうちよう}流暢に発音された英文を、感覚的ではなく、文法的にきちんと理解して聞き取り、基本的な名詞なら正確なスペルで書け

る力があるという。

「2年前に1年生を担当した時よりも、生徒たちの英語力のレベルが格段に上がっています。小学校で英語を用いたコミュニケーションを図る多様な機会があることが、大きな強みになっていると感じます」

生徒の英語力向上に伴い、1年生での指導内容を変えた。例年なら、1学期は教科書のプログラム1までしか進まなかったが、2016年度は、1学期の中間考査で「I am～」などを扱うプログラム2までを範囲とした。それでも、中間考査の正答率が8割を超えたという。例年は5月いっぱいにかけて徹底的に行っていたフォニックス指導も、4月に少し扱う程度にとどめた。

アウトプット重視の授業で ライティング力が向上

授業はペアワークやスピーチなどの活動が中心で、学期に1回、パフォーマンステストを実施している。例えば、1年生では1学期に1分間の自己紹介スピーチ、2学期に他己紹介スピーチを、2年生では1学期にALTとの90秒の対話、2学期に将来の夢についてのスピーチ及び英作文などを行う。評価は、声の大きさや目線、文法、伝えようとする意欲などの観点を設け、1つの観点につき、3～4段階で評価する。

2年生以降の定期考査では、エッセイ・ライティングを出題する。その練習として、1学期の授業で「ゴールデン・ウィークの思い出」をテーマにした英作文を書かせた。まずは、

生徒が辞書を引きながら自力で書き、どうしても分からない場合は教員に質問する。英作文は教員が添削し、その指摘を受けて、生徒がリライト。完成した英作文を全員分、廊下に掲示した。

さらに、2年生の朝学習では、毎週金曜日を「英語の時間」とし、英語で書かれた簡単な時事ニュースを読み、質問に答えるといった活動も行っている。それらの日常的な取り組みの結果、2016年2月、2年生全員が受検したGTECでは、ライティングで好成績を収めた。

「ライティングを含めた生徒の英語力を客観的に測ろうと、GTECの受検を決めました。答えは丁寧に添削されていて、ネイティブの採点者からの英語のアドバイスは生徒にとって励みになっていました。特に、成績上位層の生徒は知的好奇心を刺激されたようです。また、教員用帳票では、結果が詳細に分析されていて、指導の参考になりました」(柿葉先生)

一方、GTECで伸び悩みが明らかになったリーディングについては、予習を課さずに初見で教科書を読ま

せるなど、日々の授業で強化を図っている。

「大学入試が英語の4技能を問う試験に変わりつつあることを、普段から生徒に伝えています。高校入試でも英文和訳はほとんど出題されず、長文を読み、内容について問う問題が増えました。知らない単語があっても、その意味を推測しながら素早く読み、文章全体を把握する力が求められていることを、生徒には理解してほしいと考えています」(柿葉先生)

CAN-DO リストを作成し 到達目標を明確化

CAN-DOリストは、柿葉先生が千葉県主催の「CAN-DOリスト研究協議会」に参加してノウハウを学び、2015年度に作成した(図3)。内容は、英語が苦手な生徒でも到達できるような幅の広い表現するように配慮し、「○語以上」といった具体的な数値目標は示さず、文法用語も盛り込んでいない。これを基に、各単元で身につけさせたい力を観点別に設定し、単元計画に反映している。

到達目標が「～が理解できた」か

ら「～を用いてできる」という内容に変わったことで、生徒の学習意欲にも変化が見られた。

「ペーパーテストが苦手でも、口頭での表現が得意な生徒もいます。定期考査だけでは測りきれない力をパフォーマンステストで評価することで、多くの生徒の自信や意欲を高めることにつながっています」(柿葉先生)

一方、語彙や文法の定着が不十分なため、定期考査で期待通りの得点が取れないことも浮き彫りになった。この反省を踏まえ、2016年度は、言語活動と文法指導のバランスに配慮したリストの改訂を進めている。

今後の課題は、小学校段階で英語に対して苦手意識を感じている生徒への対応だ。英語科の滑川寿範先生は次のように語る。

「拠点事業への指定以降、生徒の英語力が高まった反面、入学段階から苦手意識を持つ生徒が見られるようになりました。中学校で気持ちをリセットさせ、英語によるコミュニケーションを楽しく感じられるよう、指導を工夫していきたいと思います」

図3 生徒配布用 CAN-DO リストとパフォーマンステストの内容

2015年度2年生 CAN-DO リスト

話すこと	(やりとり) 基礎的な語句、定型表現を用いて、日常的な話題について、簡単な意見交換をしながら対話をつなげることができる (発表) 前もって発話することを留意した上で、日常の話を限られた構文を用いて簡単な意見や説明を行うことができる
書くこと	簡単な語や基礎的な表現を用いて、まとまりのある文章(日記、メール、予定、スピーチ原稿など)を書くことができる
聞くこと	ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に必要な場所や時間などの具体的な情報を聞き取ることができる
読むこと	短い簡単な物語やまとまりのある文章を読んで、内容を理解することができる

2015年度2年生 パフォーマンステストの内容

時期	内容	CAN-DO (英語を使って何ができるようになるか)
1学期	ALTとの90秒の対話(やりとり)	つなぎ言葉を使いながら対話を続けられるようになる
2学期	全体の前で、自分の将来の夢について発表(Speech → Writing)	英語で将来の夢について語り、文章で伝えられるようになる
3学期	ディベート形式で賛成、反対について自分の意見を言う(Writing → やりとり)	自分の意見を文章で表し、英語で主張できるようになる

*西初石中学校の提供資料を基に編集部で作成



校長
高橋 徹

たかはし・とある

「生徒には、粘り強く物事に取り組む姿勢と、自分で考え、表現する力を身につけてほしい」



教諭
柿葉敦子

かしば・あつこ

研究主任。英語科。「生徒には、将来、英語を使って物怖じしない、立派な国際人になってほしい」



教諭
滑川寿範

なめかわ・としのり

学年副主任。英語科。「自分の考えを自信を持って発信できる社会人として、日本人として、活躍してほしい」